

わが“学校”金光教教学研究所

立命館大学文学部 桂島 宣弘

教学研究所開設五十周年と聞き、誠に慶賀に堪えない。思い起こせば、大学院生だった一九八二年に初めて訪れてから二十数年が経っている。だが、金光駅を下り立ち、木綿崎山を登って、初めて研究所の門前に至ったときのことは、今も鮮明に記憶している。あらかじめ近世～近代史に関わる研究に携わっていることを告げていたこともあったのか、いかにも気鋭の青年研究者という風貌の佐藤光俊現所長と応接室でお会いした。佐藤氏の名論文「『擬態』としての組織化」(『金光教学』一八号、一九七八)について、生意気にも幾つか質問し、その後に神觀念云々という研究テーマを告げたこともあって、岩本徳雄氏と金光和道氏を紹介されたはずだ。当時、「日天四と金光大神」(『金光教学』一八号、一九七八)「神名について」(『金光教学』二〇号、一九八〇)などの論文をたて続けに公けにしていた岩本氏は、落ち着きながらも鋭い質問を浴びせてくる哲学者という風貌、そして、「『堅盤谷の婆さん』考」(『金光教学』一五号、一九七五)などを著していた金光氏は、古文書の山と格闘している篤実な歴史研究者という印象だった。そして、その後は両氏から惜しげもなく研究所の貴重史料の多数をお見せいただいた。それまで間接的な形でしか知らなかった史料を、実際に見せていただいた興奮は今も忘れることができない。その夜だったか、早速に岩本氏らが一升瓶を携えて吉備之家を訪ねてくれたことも感激だった。

このとき以来現在に至る研究所とのお付き合いなくして、その後のわたくしの研究はなかったといっても過言ではない。貴重な史料を閲覧させて頂いたことが有り難かったことは無論のこと、教祖以来守られてきた金光教の息づかいといったようなものを、研究所の方々から感じることができたことは、間違いなくわたくしの金光教観を大きく変えることとなった。そして、何よりも研究所の研究員諸氏との議論が大変貴重だったことも告白しなければならない。外部のものだろうが、研究員諸氏の議論はいつもストレートで、そこにいささかの妥協もなかったといつてよい。したがって、わたくしにとっての研究所通いはいつも真剣なものにならざるをえなかった。正直いって『金光大神御覚書』をいつも「予習」し、さらに『金光教学』の論文を精読してから、わたくしは研究所に通うはめになっていたのである。だが、そのことは研究所がわたくしにとって重要な“学校”となっていたことを意味していたのである。

教学研究所の存在を知ったのは、真鍋司郎「民衆救済の論理」(『金光教学』一三号、一九七三)によってであった。当時、民衆宗教の成立を近世の民俗信仰との関連で検討しようとしていたわたくしは、同論文が金光教成立を金神信仰の系譜との関係で検討し、のみならずそれに伴われる教祖の内面の葛藤を、独特の文学的名文で分析していることを知って絶句した。深い感銘とともに、最早わたくしには何もなすべきことがないと思われるくらいに、完璧な論文だった。次いで、藤尾節昭氏、高橋行地郎氏、瀬戸美喜雄氏、福嶋義次氏らの論考に引きつけられていったわたくしは、未だ見たことがない史料もさることながら、研究所の気風に大変興味を覚えるようになっていった。そして、それは今も変わらない研究所への深い信頼となっているといつてよい。すなわち、堅実な学問研究は当然としても、それをなさしめている自己への問いかけが、常に息づいているその研究気風とでもいべきもの、これである。信心への問いかけ、神や教祖との対話といいかえてもよい。なるほど、非信者のわたくしにそれは理解できないものなのかもしれない。だが、研究の

原点を問い続けることなくして、いかなる分析もただの死んだ言語の羅列になってしまうことを、『金光教学』の論考は、そして研究員諸氏の生きざまは、わたくしに鋭く突きつけていることは間違いない。その意味で、研究所はわたくしにとって、学問研究以上の“人生の学校”にもなっていたのである。今後も、われわれ俗人に、新鮮な問いかけを発し続ける場、“学校としての研究所”の発展を心底より期待申し上げる次第である。